

小池 宏明 牧師

**\*主に用いられるサムソン**

今日は、士師記に登場する 12 人の士師（さばきつかさ）の中で、サムソンを取り上げる。サムソンは、生まれる前からナジル人（聖別された者）と定められ、髪の毛を剃ってはならないという誓願をしていた。しかし、本人はナジル人としての自覚が乏しく、自由奔放で、直情的な言動を繰り返していた。ところが、主なる神様は、そんなサムソンを用いて、ペリシテ人を懲らしめて、ご自分の民イスラエルを救い出そうとされた。主の目に悪（偶像礼拝）を重ねて、40 年もペリシテ人の支配に苦しむイスラエルの民は、もはや神様に助けを求めさえしなくなっていたが、主なる神様は一方的に憐れみを示された。

**\*怪力で女好きなサムソン**

サムソンは、敵であるペリシテ人の娘や遊女と関係を持って、その度に、ペリシテ人を殺したり損害を与えたりしていた。それは、主の霊によって奮い立つサムソンが、ペリシテ人からイスラエルを解放するように働く主のご計画によることである。主なる神様はサムソンを軍事的なリーダーにしたが、士師（さばきつかさ）は、霊的な信仰や礼拝においても指導者であるべきなのだ。サムソンの場合は、自分勝手に、荒々しく、霊的な面では多くの欠けがあった。やがて、それが彼を苦しめることになる。サムソンはペリシテ人の女性デリラを真剣に愛していたので、デリラに言い寄られて死ぬほど辛い経験をする。デリラはペリシテ人の領主たちから買収されていて、サムソンの怪力の秘密を聞き出すように求められていたのだ。サムソンは、自分がナジル人（神様によって聖別された者）として自覚が乏しかったため、デリラの誘惑に負けて、怪力の秘密を打ち明けてしまった。その後は、サムソンは捕えられて、両目をえぐられて、臼引きの仕事をさせられることになった。

**\*本気で主を求めるサムソン**

サムソンは、両目を取られて真っ暗闇の中で、自分の生き方を振り返ったことだろう。主なる神様から与えられている怪力を、まるで自分の力のように勘違いして、高慢になってしまったことを心から悔い改めた。彼は、主なる神様に「どうか私に心を留めてください」（16:28）と祈っているが、主なる神様はいつもサムソンに御目を留めて下さり、用いて下さっているのに、彼は気に留めていなかったのだ。私たちは、主が力を与えていてくださるのに、自分の実力で生きていくと誤解していないだろうか。悔い改めて、主を仰ぎ見よう。